

## ヘーゲル『精神現象学』における「欲望の経験」再考

飯泉 佑介

### 1. はじめに — 『精神現象学』における欲望から承認への移行の問題

ヘーゲルの『精神現象学』（1807年、以下『現象学』）は、「真なる知へと推し進められる自然的意識の道」（GW9, 55）、すなわち、感性的確信から絶対知に至る意識の経験の過程を叙述する企てである。この複雑な過程は、しばしば「うんざりするほどの混乱がある」（加藤 2012, 29）と評価されてきた。それに対して、『現象学』の文脈に即して、その都度の意識の主体と客体との関係、および、それを観望する〈われわれ〉の観点に着目するならば、意識の経験の過程の〈必然性〉が明らかになるのではないだろうか。本稿は、このような観点から『現象学』全体を再解釈する試みの一環として、同著の自己意識章冒頭部における欲望から承認への移行のあり方を考察する。しかし、なぜ、この論点が取り上げられなければならないのだろうか。

自己意識章の冒頭部は、『現象学』本論で最初に精神が言及される箇所として知られている。「われわれに対して（für uns）、すでに精神の概念が現存している」（GW9, 108）。ヘーゲルによれば、自らを精神として知る精神こそ「学」であり（GW9, 22）、そうした精神の「直接的な定在」が意識である（GW9, 29）。そのため、学への道を歩む意識は、まずもって精神の段階に到達しなければならない。意識の経験の過程がこうした展開をとると見込まれる以上、『現象学』全体を再解釈する本研究が、同箇所における「精神の概念」の意味を究明することは不可避である。

しかし、ここで突き当たるのが、欲望（Begierde）と承認（Anerkennung）をめぐる解釈問題である。ヘーゲルは上述の箇所で唐突に「精神の概念」に言及するが、文脈を見れば、それは承認（自己意識の二重化）の言い換えであることがわかる（GW9, 108）。この承認は、欲望から移行してきた意識の形態に他ならない。それゆえ、「精神の概念」の意味を究明するには、まずもって欲望から承認への移行のあり方を解明することが求められる。ところが、この移行は、『現象学』の中でも最も深刻な問題を孕む移行のうちの一つと見なされている。欲望の意義を重視する J. イポリットや A. コジューヴと、承認の意義を重視する H. - G. ガ

ダマーや A. ホネットとの間で解釈が大きく異なるのは、その証左である。したがって、「欲望と自己意識 [承認] の連続面と非連続面を押さえる必要がある」

（片山 2002, 87-8）のは言うまでもないが、その際は、いかにして「連続面と非連続面」を浮かび上がらせるかという点に注意しなければならないのである。

以上の課題と解釈状況を踏まえて、本稿は、「精神の概念」の導出への展望を見据えつつ、意識の主体と客体の関係に着目することによって、欲望から承認への移行のあり方を解明することを目指す。この試みによって、既存の解釈では不明瞭だった欲望と承認との「連続面と非連続面」が解明されるだけでなく、この移行の有する意味が明確になると思われる。

本稿は、次のような仕方で考察を進める。最初に、『現象学』自己意識章冒頭部における欲望概念と承認概念を概観し、後の考察の準備を行う（第2節）。次に、欲望から承認への移行を可能にする〈欲望の経験〉の過程を再構成した上で、そこでの解釈上の難点を指摘する（第3節）。さらに、欲望と承認の各々の主体・客体関係に着目して、〈欲望の経験〉を新たに解釈することによって、先の難点の解決を試みる（第4節）。以上を踏まえて最後に、欲望から承認への移行が、意識の経験の過程において有する意義について簡単に考察する（第5節）。

## 2. 予備考察 —欲望概念と承認概念の概観

### 2. 1 自己意識章冒頭部における欲望と承認の位置づけ

本稿が焦点を当てる自己意識章の冒頭部は、同章の本論である A「自己意識の自立性と非自立性、主人性と奴隷性」と B「自己意識の自由 ストア主義、懷疑主義、不幸な意識」に先立つ、わずか数ページの、無題の範囲にすぎない。だが、それにもかかわらず、そこでは、欲望や承認、生命や類といった『現象学』の根幹に関わる諸主題が論じられている。本節では、本論に入る前に、この自己意識章冒頭部における欲望と承認の位置付けと基本的な意味を押さえたい。

自己意識章は、感性的確信節、知覚節、悟性節からなる意識章に後続しており、理性章に先行した章である。ここで重要なのは、意識章から自己意識章に入るときに、ヘーゲルが、「今やわれわれは、自己意識とともに、真理の郷土的な王国へと踏み込んだ」（GW9, 103）と述べていることである。この宣言は、『エンツィクロペディー』で示されているように、自己意識が、先行する意識章における意識の「真理」であり「根拠」であることを示唆している（GW20, 427）。つまり、ここでヘーゲルは、意識が自己意識の段階に到達したことをもって、意識の

真理が自己意識であることが明らかになったと考えている。それゆえ、確かに自己意識の具体的な形態は、後の自己意識章本論において「主人」や「奴隷」、「ストア主義」や「懐疑主義」として示されるとはいえ、同章冒頭部は、自己意識の概念そのものの提示という重大な役割を果たしているのである。

欲望と承認は、純粹自我とともに、まさにこうした自己意識の概念を構成する契機として言及されている（GW9, 108）。（実際には、承認ではなく、「自己意識の二重化」と表記されているが、後述するように、それは承認関係の基礎を表した表現である。）もともと、ここでいう「契機」は、自己意識という概念の単なる意味論的な要素なのではない。形式的に言えば、純粹自我は欲望へ移行し、欲望は自己意識の二重化へと移行し、その結果として「自己意識の概念は漸く完結する」（*ibid.*）。つまり、先行する契機は後続する契機へと継起的に移行し、最終的に「自己意識の二重化」（承認）に到達することではじめて自己意識の概念が成立すると、ヘーゲルは考えているのである。

## 2. 2 欲望と承認の基本的な意味

それでは次に、自己意識章冒頭部における欲望と承認の基本的な意味を確認していこう。最初に欲望から見るならば、それは（典型的には食欲に表れるような）生命的な同化の活動を意味すると考えられる。この解釈は、欲望をより高次の欲望（*désir*）と見なすイポリットらの理解や、分析哲学の枠組みを用いて解釈する R. B. ピピンの理解と根本的に異なる。そこで本稿の解釈の根拠を示しておこう。

まずヘーゲルは、自己意識章冒頭部で、「自己意識の自分自身との統一」がそれにとって「本質的にならなければならない」ような意識を「欲望一般（*Begierde überhaupt*）」と規定している（GW9, 104）<sup>1</sup>。この「欲望一般」は、単なる一つの対象ではなく、「二重化された対象」をもっている。その一方は、「意識に対して（*für es*）、否定的なものという性格によって示される」、「直接的な対象、感性的確信と知覚の対象」であり、他方は、「はじめはやつとただ最初の対象との対立において現存する」、「真なる本質」としての「自分自身」である（*ibid.*）。これは、次のような事態を表していると考えられる。すなわち、欲望は自らと対立的に存在している目の前の（直接的な）対象を否定し、そのことによって自らの対象を自分自身だけとする、と。こうして欲望は、「欲望の本質」である「自己意識の自分自身との統一」（*ibid.*）を達成すると考えられる。

このような規定を踏まえて欲望のより具体的な理解を得るためには、同箇所での生命と生命体についてのヘーゲルの考察を参照する必要がある。それによれば、

「直接的な欲望の対象は、ある生命体 (ein Lebendiges) である」 (ibid.)。それに対して、生命 (das Leben) は、「自らを展開し、その展開を解体し、こうした運動において自らを単純に保持する全体」 (GW9, 107) と規定されている。ここでは、生命の「自立的な諸形態」、すなわち、個々の生命体が、「この [実体の] 流動性を拒否し」、「この自らにとって非有機的な自然から分離することによって、そして、この自然を食い尽くすこと (Aufzehren) によって、自らを保持する」 (GW9, 106) <sup>2</sup>。この論述から分かることは、欲望は、それが一つの生命体である限り、他の生命体を「食い尽くすこと」を意味するということである。たとえば、獣が獲物を「食い尽くす」とき、獣は自らと対立していた獲物を否定し、そのことを通じて自分自身を統一する。こうして対象を否定し同化する生命活動こそ、自己意識章冒頭部における欲望の範型だと考えられるのである<sup>3</sup>。

続いて、承認の意味を確認しよう。「承認する (anerkennend)」ないし「承認された (anerkannt)」という表現は、自己意識章 A の冒頭部ではじめて言及される。そこで叙述される「承認の運動」 (GW9, 109) は、「ある自己意識に対して、他の自己意識が存在する」 (ibid.) という規定から始まり、最終的に「それら [ある自己意識と他の自己意識] は、互いに承認するものとして互いに承認する」 (GW9, 110) という規定へと至るものである。この運動の出発点となる自己意識同士の関係は、「ある自己意識に対して、ある自己意識が存在する」という「自己意識の二重化」 (GW9, 108) を指している。そのために、承認は (前節で先取りしたように) 「自己意識の二重化」に基礎を置くことができるのである。

こうした自己意識同士の関係が承認と呼ばれることになる所以は、次の点に存する。すなわち、「他の自己意識への関係における自己意識のこの運動」は、「一方の行為 (das Thun des Einen)」として、しかし、同時に「他方の行為 (das Thun des Anderen)」でもあるような「一方の行為」として考えられる (GW9, 110)。つまり、ここでの承認概念は、ある自己意識 A の他の自己意識 B に対してなす行為が、自己意識 B の自己意識 A に対してなす行為と同一であることを表している。

「各々は、自分が相手 (das Andere) に要求するところのものを自分でも行為し、そのために、自分が行為するところのものを行為するのは、相手が同じことを行為する限りにおいてのみである」 (ibid.)。こうしてみると、承認とは、ある自己意識が他の自己意識の何らかの「価値」 (Kojève 1947, 14) を認めることではなく、ある自己意識と他の自己意識との相互制約的な行為を表しているのである<sup>4</sup>。もっとも、このような承認は、「承認の純粋な概念」 (GW9, 110) といわれるように、抽象的な事態を表しているにすぎない。承認の具体相は、同章 A の「主人」

と「奴隷」における「一面的で不当な承認」（GW9, 113）など、『現象学』の後の箇所而言及される。それゆえ、自己意識章冒頭部における承認は、自己意識同士の具体的な（社会）関係のいわば基本原理を示していると考えられるのである<sup>5</sup>。

### 3. 〈欲望の経験〉についての解釈

#### 3. 1 自己矛盾に陥る欲望

さて、自己意識章冒頭部における欲望と承認を概観したところで、欲望から承認への移行についての考察に移ろう。本節では、この移行を成立させる〈欲望の経験〉、つまり、欲望がなす「対象の自立性の経験」（GW9, 105）に主眼を置いて、移行過程の再構成を試みたい。その結果、欲望が、「他なるもの」を廃棄して満足に至る一方、そこにおいて自己矛盾に陥ることが示されるだろう。

〈欲望の経験〉の叙述は、自己意識章冒頭部の後半において、純粹自我としての自己意識が、自立的な生命としての「他なるもの」を廃棄するところから始まる。「それゆえ、自己意識は、それにとって自立的な生命として現れているこの他なるものを廃棄すること（Aufheben）を通じて、ただ自分自身を確信するだけである。自己意識は、欲望である」（GW9, 107）。この「他なるもの」の廃棄という規定のうちに、前節で確認した生命活動としての欲望の特徴を見出すことは難しくない。ただし、欲望の経験の叙述では、そうした欲望の確信と真理に焦点が当てられていることに注意したい。すなわち、欲望としての自己意識は、「他なるものの無性（Nichtigkeit）を確信しつつ」、「自立的な対象を無化し（vernichten）、そのことによって、自らに真なる確信として自分自身の確信を与える」（ibid.）。つまり、欲望は「他なるもの」の無化を通じて、「他なるものの無性」という「確信」を、裏を返せば「自分自身の確信」を「真なる確信」にするのである。この「真理になった確信」は、後に「欲望の満足」とも呼ばれる（GW9, 108）。ともあれ、このように「他なるもの」を廃棄した欲望の満足によって、「自己意識の自分自身との統一」（GW9, 104）が達成されたことは明らかだろう。

ところが、次の段落でヘーゲルは、欲望の満足において逆説的な事態が生じていることを指摘する。「欲望と、その満足において到達される自分自身の確信は、対象によって制約されている。というのも、確信は、この他なるものを廃棄することによって存在している[が]、このように廃棄するためには、この他なるものが存在しなければならないからである」（GW9, 107）。当たり前のことではあるが、欲望が「他なるもの」を廃棄するためには、廃棄される当の「他なるもの」

が予め存在していなければならない。この意味での「他なるもの」は、欲望の根底に常に存在する〈対象〉であろう。ヘーゲルによれば、こうした〈対象〉によって欲望は「制約されている」。そうであれば、「他なるもの」の廃棄という欲望の遂行と、「他なるもの」の存在という欲望の条件は互いに矛盾していることになる。欲望は、自らの満足において必然的に自己矛盾に陥る、いいかえれば、欲望は必然的に「遂行的矛盾」（Neuhauser 2009, 43）を引き起こすのである<sup>6</sup>。

### 3. 2 承認への移行についての解釈上の難点

以上の〈欲望の経験〉を叙述することによって、ヘーゲルは欲望が構造的に孕む矛盾を浮かび上がらせたと行うことができるだろう。もっとも、この理解は、概ね解釈者たちによっても認められている。解釈が分かれるのは、こうした矛盾的な事態からどのようにして承認が登場してくるのかという点に他ならない。そこには、少なくとも二つの解釈上の難点がある。一つ目は、〈欲望の経験〉を通じて明らかになった「真理」の内容である。焦点となる論述を引用しよう。

したがって、自己意識は、自らの否定的な関係によっては、対象を廃棄することはできない。このため、自己意識は、欲望 [がそうするの] と同様に、むしろ対象を再び産出する。欲望の本質は、実際には、自己意識とは別のものである。そして、この経験を通じて、自己意識自身にとって、こうした真理が生成している。（GW9, 107-8）

すでに見たように、欲望はその都度の対象（生命体）を否定することによって満足に達するが、その根底にある〈対象〉を廃棄することはできない。引用文の一文目は、こうした欲望の有する欠陥が示唆されていると考えられる。

問題となるのは、引用文の後半である。そこでは、〈欲望の経験〉によって「欲望の本質は、実際には、自己意識とは別のものである」という「真理」が生成したことが指摘されている。この「真理」は、欲望と自己意識が区別されていることを表していると理解できる<sup>7</sup>。だからこそ、引用文の後では、欲望の満足ではなく、「自己意識にとって、その満足が生成しなければならない」（ibid.）と主張されるのである。だが、これまで欲望と自己意識が同一視されてきたことからすれば、両者の区別は唐突といわざるをえない。なぜ、どのような意味で、欲望と自己意識は区別されるのだろうか<sup>8</sup>。これが最初の難点である。

欲望から承認への移行に関するもう一つの解釈上の難点は、「他の自己意識」

の導出にかかわる。上述したように、引用文の後で「自己意識にとって、その満足が生成しなければならない」(GW9, 108)という課題が提示されるが、この課題は、段落の最後で「自己意識は、他の自己意識において、自らの満足に到達する」(ibid.)という規定によって答えられる。こうした論述の展開は、欲望から承認への移行の核心を示しているように思われる。なぜなら、承認は〈ある自己意識と他の自己意識との相互制約的な行為〉を意味していたが、ここではまさに承認の対象としての「他の自己意識」が導出されていると考えられるからである。ところが、ここでヘーゲルが「他の自己意識」の導出を説明するその仕方は、決して明瞭ではない。「対象は自分自身のこの〔対象自身において(an ihm) 遂行する〕否定を即自的に(an sich) 遂行しなければならない。〔…〕対象が、それ自身における否定(die Negation an sich selbst)であり、そこにおいて同時に自立的であるとき、それは〔自己〕意識である」(ibid.)。つまり、自己意識の満足する対象(承認の対象)が、なぜ、(1)「それ自身における否定」であり、(2)「自立的」であるという条件を有するのか、さらに、なぜ、(3)そうした条件を満たす対象が「他の自己意識」であるのか、といった点が不明瞭なのである。

以上のように、欲望から承認への移行に関しては、少なくとも二つの解釈上の難点が指摘されうる。しかし、従来の解釈は、この点を明確に捉えた上で、解決を試みてきたとは言い難い<sup>9</sup>。そこで次節では、欲望と承認を、それぞれの主体・客体関係に着目して考察していきたい。この試みによって、既存の解釈よりも整合的に〈欲望の経験〉のあり方を解明することができるだろう。

#### 4. 意識の主体・客体関係に着目した〈欲望の経験〉解釈

##### 4. 1 『現象学』における意識の主体と客体

本節では、意識の主体・客体関係に着目して、〈欲望の経験〉を再考する。ところで、そもそも意識の主体と客体との関係とは、何だろうか。意識概念を主体(Subjekt)と客体(Objekt)という術語によって説明することは、『現象学』ではなく、むしろ後年の『エンツィクロペディー』内の「精神現象学」で行われている<sup>10</sup>。それにもかかわらず、本稿が『現象学』における意識形態をその主客関係に着目して分析することの狙いは、次の点にある。すなわち、このアプローチをとることによって、意識形態の相互の差異が浮き彫りになるだけでなく、その都度の〈意識の経験〉のあり方が鮮明になると思われるのである。

具体的に見てみよう。たとえば、『現象学』で最初に論じられる意識形態であ

る感性的確信とは、時空間の内で個別的に存在するものを感性的に確信し、その個別性を真理と見なす意識の主体である。したがって、そうした感性的意識にとっては、「このもの」や「今」といった個別的で感性的なものが対象（客体）として現れてくる（GW9, 63）。同様に、知覚という意識主体には「物」が、悟性という意識主体には「法則」や「力」が、それぞれ対象（客体）となる。

このように、主体と客体は、その都度の意識形態において、それに固有な仕方とで相関的に対応しているように見える。しかし、ヘーゲルは、この主客の対応関係に孕まれる矛盾を浮かび上がらせる。たとえば、「このもの」を個別的なものとして見なす感性的な確信を叙述することによって、実際にはこの意識が「言明する」や「指し示す」といった仕方と「このもの」に関係していることを明らかにするのである。ヘーゲルによれば、「このもの」は〈個別的なもの〉であるが、発話や指示行為を介した対象への関係は〈普遍的なもの〉であるため、ここでは対象とそれへの関係が、感性的確信の自己矛盾として示されていることになる。

しかし、こうした意識の自己矛盾の露呈は、ただ否定的な事態を意味するのではない。ヘーゲルは、まさにある意識形態の矛盾が露わになることにおいて、当の矛盾を包含する「新しい対象」が生成し、それを対象とする「新しい意識形態」が登場すると述べている（GW9, 61）<sup>11</sup>。そうした「新しい対象」は先行する対象の真理であり、「新しい意識形態」は先行する意識形態の真理である。このように自己矛盾の露呈とともに「意識自身の転回」（ibid.）が生じ、意識形態はより高次のものへと移行する<sup>12</sup>。したがって、ある意識の主体・客体関係を考慮することは、その意識の経験を理解する上で極めて有用だといえるのである。

それでは早速、自己意識という意識形態を、その主体・客体関係に着目して考えてみたい。そうすると、少なくともそれが、自分自身という客体に関係する意識主体であることは明らかであろう。だが、重要なのは、〈自分自身に関係する〉、いいかえれば、〈自分自身を統一する〉ことの内実である。なぜなら、この自己統一の内実の差異に従って欲望と承認は区別されると考えられるからである。こうした見通しのもと、欲望と承認の主客関係を詳細に分析し、両者の構造的差異を明らかにしていこう。

#### 4. 2 欲望の主客関係と承認の主客関係

はじめに欲望の主客関係から見ていこう。本稿第2節によれば、欲望とは、直接的な対象を否定し、自分自身だけを本来の対象と見なす意識主体を指すといわれていた。それゆえ、その対象（客体）は、一方で自分と区別された直接的な対



象であり、他方で直接的な対象を同化した自分自身でもあると規定されていた。このような欲望と対象の関係は、(感性的確信や知覚のそのように)主体と客体として単純に区別されたものではない。両者は、区別されていると同時に、自分自身として統一的に関係付けられているのである。

ただし、ここでヘーゲルが、生命も、自己意識としての欲望に対立するもの、すなわち、その対象と見なしていることを看過してはならない(GW9, 105)。この規定は、前述した欲望の主客関係と相反するわけではない。すでに示したように、欲望の根底には、欲望自身が廃棄できない(対象)が存在していた。欲望を制約するこの(対象)こそ、生命なのだと解釈できる。というのも、欲望自身が、「自らを展開し、その展開を解体し、こうした運動において自らを単純に保持する全体」(GW9, 107)としての生命に制約された一つの生命体だからである。もっとも、前述したように、欲望にとっては、他の生命体と自分自身しか対象は存在しない。それゆえ、(対象)としての生命は、欲望の対象そのものではなく、いってみれば、そうした欲望の対象(自分自身と生命体)の真理なのである。

では次に、承認の主客関係は、どのように理解されるべきだろうか。本稿第2節は、承認が、「ある自己意識が、ある自己意識に対して存在している」(GW9, 108)という関係に基づくことを示していた。それによれば、承認の主客関係は、主体である(自己)意識が他の(自己)意識を対象とすることに存すると言うことができる。だが、この関係は、次のようにも表現される。「ある自己意識が対象であるとき、対象は、対象であると同時に、自我である」(ibid.)。つまり、自己意識は自我なのだが、その対象も自我である、ただし、対象であり、且つ同時に、自我なのである。このため、承認の自我と対象は、主体と客体として区別されつつも、対象は同時に自我であり、また(相互性の故に)自我は同時に対象であるという仕方で統一されているのである。

以上の分析によれば、欲望と承認はともに、それぞれ主体と客体とに区別されながらも、「自己意識の自分自身との統一」(GW9, 104)を形成していることになるだろう<sup>13</sup>。つまり、両者の主客関係には、「区別されえないものを区別すること、いいかえれば、区別されたものを統一すること」(GW9, 105)、すなわち、ヘーゲルのいう「無限性(Unendlichkeit)」(GW9, 99)の構造が伏しているのである。しかし、それでは、欲望と承認の差異は、どこに存するのだろうか。それは、「自己意識の自分自身の統一」の有無ではなく、むしろこの統一のあり方の違いに存すると考えられる。それぞれの統一のあり方を検討してみよう。

まず欲望の場合、その主体(欲望)は、生命体としての対象を無化し、自分自

身を確信するという仕方ですべて統一している。このとき他の生命体は、欲望にとっては「他なるもの」として存在していないと解釈するべきだろう<sup>14</sup>。そもそもある意識主体にとって対象が「他なるもの」として存在するためには、この対象が意識の自己との区別において（つまり、自分とは「異なるもの（Andere）」として存在しなければならない。しかし、欲望は、本質的に自分自身のみを対象とすると規定されていた（GW9, 104）。それゆえ、確かに欲望において主体と客体は区別されるものの、この区別は当の欲望にとっては存在しないも同然なのである。

それに対して、承認は、「自らの他在における（in seinem Andersseyn）自分自身の統一」（GW9, 108）と呼ばれていることに注意したい。この「自らの他在」という表現には、意識の自己と「他なるもの」としての対象との区別が含意されていると考えられる<sup>15</sup>。実際ヘーゲルは、自己意識が「他なるもの [他の自己意識] を本質として見るのではなく、自分自身を他なるものにおいて見る」ことを、「自らの他在」と言い換えている（GW9, 109）。したがって、この「自らの他在において」という契機の故に、承認の対象は、対象であると同時に自我であること、すなわち、「他の自己意識」であることが可能となると考えられるのである。

このように、承認の場合に、自己から区別された対象において両者が統一されているのだとすれば、それと対比される欲望の統一は、「自分自身において」、つまり、自己の側でのみ成立していることになる。それゆえ、欲望と承認は、自分自身における自己統一か自らの他在における自己統一かという点に関して異なると解釈できるのである。

#### 4. 3 〈欲望の経験〉の再考

さて、以上の欲望と承認の構造的差異についての分析を踏まえて、改めて〈欲望の経験〉のあり方を考えてみたい。とりわけ前節で指摘した解釈上の二つの難点は、どのようにして解決されるのだろうか。

一つ目の難点は、「欲望の本質は、実際には、自己意識とは別のものである」という「真理」における、欲望と自己意識の区別に関する問題だった。前述したように、欲望の主客関係は〈自分自身における自己統一〉というあり方をしており、その限りで自己意識の一つの形態である。だが、ここで上述の「真理」が〈欲望の経験〉の結果として生成したことを考慮しなければならない。この経験によって、欲望は〈対象〉としての生命を廃棄できないことが明らかになっていた。つまり、欲望は、生命体としての対象を廃棄しつつ自分自身を統一する一方で、生命という〈対象〉を対象化しえず、いわば放置しているのである。このことは、

自己統一を完遂できないという欲望の一面を表しているといえよう。まさにこの欠陥の故に、欲望は、自分自身を対象とする「絶対的に対自的な (für sich)」(GW9, 108) 自己意識とは「別のものである」といわれるのである。

二つ目の難点は、欲望から区別される限りでの自己意識にとって、その対象が「他の自己意識」であることが示されるという文脈で生じていた。それは、自己意識の満足する対象は、なぜ (1) 「それ自身における否定」であり、(2) 「自立的」であることを条件とするのか、さらに、なぜ、そうした条件を満たす対象は (3) 「他の自己意識」であるといえるのか、という疑問である。この疑問に答えるために、まず前述した欲望の欠陥を反転させてみよう。そうすると、欲望の代わりに登場する自己意識の対象は、自己統一を完遂するものでなければならないことがわかる。いいかえれば、それは、自らが依存する〈対象〉さえも自らの対象とする。自己意識の満足する対象に、(2) 自立性 (非依存性) が要求されるのは、このためだと考えられる。

ところで、ヘーゲルは、こうした「即自的に」「自立的」である対象を生命と呼んでいた (GW9, 105)。ここから、自己意識の満足する対象は、「類」、もしくは、「生きた (lebendiges) 自己意識」と見なされることになる (GW9, 108)。だが、この対象には、もう一つの条件 (1) が求められていた。つまり、「対象は自分自身のこの否定を即自的に遂行しなければならない」(ibid.)。ここで対象が自らの否定を即自的に遂行するといわれるのは、その対象が、単なる客体ではなく、主体でもあることを表すと解釈できる。なぜなら、意識の主体・客体関係によれば、本来対象は意識主体にとっての客体を指しているが、意識 (主体) が対象であるならば、そうした対象は即自的に (それ自身のままで) 自分自身を否定しているといえるからである。いってみれば、「それ自身における否定」としての対象は、「対象であると同時に、自我 [意識] である」(ibid.) ものそのものを表現しているのである。こうして、「自立的」で「それ自身における否定」である対象が、(3) 「他の自己意識」であることが示されるのである。

以上、意識の主客関係を踏まえて、〈欲望の経験〉に関する解釈上の難点の解決を試みた。その結果、欲望から承認への移行はより整合的に理解できるようになったと思われる。すなわち、まず欲望の自己矛盾において、自己意識としての欲望の欠陥が指摘され、そこから自己意識の対象としてより相応しい対象が考察される。そうした対象は、「自立的」であるだけでなく、「それ自身における否定」、つまり、主体であり且つ客体であるような対象、つまり、「他の自己意識」でなければならない。こうして、「他の自己意識」を対象とする承認 (二重化さ

れた自己意識）が登場すると考えられるのである<sup>16</sup>。

## 5. おわりに — 自己意識章冒頭部における欲望から承認への移行の意義

最後に、欲望から承認への移行が意識の経験の過程において有する意義について簡単に考察しよう。本稿冒頭で引用したように、ヘーゲルは承認の主体・客体関係に関連して次のように述べている。「このことによって、われわれに対して、精神の概念がすでに現存している」（GW9, 108）。本稿の解釈を踏まえるならば、この規定は、ヘーゲルないし「われわれ」が、まさに承認の主客関係のうちに精神の原初的な構造を見て取っていることを意味する。ここで承認の主客関係が「自らの他在における」という契機を特徴としていたことを想起しなければならない。この契機は、精神の構造にとって決定的に重要である。よく知られているように、精神の自己認識、つまり、絶対知における認識は、「〈絶対的な他在における〉純粹な自己認識」（GW9, 22、山括弧は引用者）だからである。

もっとも、フルダの指摘するように、自己意識章の段階において、「精神の概念」は、漸く「われわれに対して（für uns）」現れているだけであり、まだ「意識に対して（für es）」は現れていない<sup>17</sup>。このことは、「自らの他在における」という契機が、潜在的には自己意識の構造に組み込まれているものの、当の自己意識にとっての対象ではないことを意味する。つまり、まだ自己意識は、自分自身と他の自己意識との関係を積極的なものとしては捉えていないのである。

ともあれ、以上の展開から、「精神の概念」としての承認の登場が、極めて先駆的な仕方ではあれ、精神の現象の出発点となっていることは明らかだろう。そして、それに対して欲望は、精神が現象する以前の意識の経験の過程の終結を特徴づけるに過ぎないことになる。いってみれば、欲望の終わるところで精神の現象が始まるのである。このような本稿の解釈は、欲望をもって「意識の根源的な構造」と見なす解釈とは相容れない（Hyppolite 1946, 154）。だが他方で、承認を、精神章の「道徳性」を先取りした「原道徳（Protomoral）」として高く評価する立場にも与しない（Honneth 2008, 203）。肝要なのは、欲望や承認といった諸々の意識形態に固有の主客関係を把握することである。そうすることによってのみ、欲望から承認への移行が、道徳哲学や社会哲学的な意義だけではなく、「学」を目指す意識の経験の過程にとって決定的な意義を有することが示されるのである。

<sup>1</sup> 幸津國生や山口誠一は、「欲望一般」と次の段落で提示される「直接的な欲望」（GW9, 104）との区別を重視しているが（山口 1989, 126; 幸津 1991, 190-4）、この区別は欲望概念の本質

に関わるとはいえないだろう。欲望が「直接的な欲望」と呼ばれるのは、その対象が（生命ではなく）直接的な「生命体」に限定されているときに限られると思われる。

<sup>2</sup> ただし、生命の諸形態は、他の形態を「解消する」だけでなく、それを「産出する」ものでもあるため、生命は「形態化と過程という契機」を備えているとされる（GW9, 107）。このような生命概念は、今日の言葉でいえば、生態系システムに近似している。

<sup>3</sup> したがって、この欲望概念に、「欲望の単なる自然的な表出であるような活動」（動物的な欲望）と「欲望を満足させるために企てられる活動」（人間的な欲望）との区別を挿入するピピンの解釈は恣意的だと言わざるを得ない（Pippin 2011, 36-7）。こうした解釈は、ジョン・マクダウェルやロバート・ブランダムら分析的ヘーゲル主義（analytic Hegelianism）の理論家の見解に沿っていると考えられる。Pippin (2011, vii-viii) を参照。

<sup>4</sup> 自己意識章で叙述される自己意識同士の関係を、「承認への欲望」ないし「人間的な欲望」と見なす解釈は枚挙に暇がない（cf. Butler ([1987] 2012, 33) ; Hyppolite (1946, 161) ; Kimmeler (1978, 274) ; Kojève (1947, 11-4) ; Pippin (2011, 36) ）。テキストに沿う限り、この解釈は成り立たないと思われるが、本稿では、Gadamer (1973, 241)、幸津 (1991, 195)、Honneth (2008, 200) らによる批判を参照として挙げるに留めたい。

<sup>5</sup> 承認の純粋な概念ではなく、自己意識同士の具体的な承認が、意識の経験のどの段階において成立しているかという論点はしばしば議論されてきた。たとえば、片山善博は、良心章において承認が成立すると主張している（片山 2002, 63）。

<sup>6</sup> F. ノイハウザーは、〈欲望の経験〉に関連して、欲望の自立性と依存性の関係に基づく解釈と、欲望の個別性と普遍性の関係に基づく解釈という二つの解釈の可能性を提示している（Neuhauser 2009, 43）、後者は『エンツィクロペディー』の「精神現象学」における欲望から承認への移行のあり方に該当すると思われる（cf. GW20, 429-30）。

<sup>7</sup> 欲望から区別される自己意識について、たとえば、ホネットは「存在論的欲望」と呼んでいる（Honneth 2008, 200）が、この自己意識を欲望の一種と理解することは、欲望と承認との関係を曖昧にしかねない。「自己意識の満足」という表現は、新しい対象の導出の必然性を示しているに過ぎないと思われる。他にも、Gadamer (1973, 226)、幸津 (1991, 188) などを参照。

<sup>8</sup> 本来であれば、ここで「真理」が「生成している」といわれることの意味も問われるべきだろう。この点について、Hyppolite (1946, 157) や Gadamer (1973, 225)、Butler ([1987] 2012, 41) は、欲望が自らの真理を知ることと解釈している。しかし、欲望は、その主客関係の構造上、承認の観点を持ち得ないのだから、自らの真理を知ることはないと解釈すべきである。

<sup>9</sup> たとえば、イポリットはこの規定での「別のもの (ein anderes)」を「欲望における他性 (l'altérité)」と理解しているが（Hyppolite 1946, 156）、その意味ははっきりしない。また、ガダマーの指摘するように、イポリットやガダマーは、「承認への欲望」を主張することによって、「欲望の概念の助けを借りて」欲望から承認への移行を説明している（Gadamer 1973, 241）。そのため、これらの解釈は「他の自己意識」を前提しており、その導出を見過ごしているのである。

<sup>10</sup> 『エンツィクロペディー』（1830年、第三版）第415節を参照。「客体の論理的な進行規定は、主体と客体のうちにおける同一なもの、つまり、両者の絶対的な結合、それによって客体が主体のそれ自身のものであるところのもの、である」（GW20, 422）。

<sup>11</sup> これは、感性的確信の例でいえば、個別性と普遍性を併せ持つ「物」が生成すること、そして、それを対象とする「知覚」という意識主体が登場することを指している（GW9, 70）。

<sup>12</sup> 『現象学』緒論の第15段落における「意識の諸形態の全系列をその必然性において導くもの」（GW9, 61）に関する論述を参照。そこには、規定的否定を原動力とする〈意識の経験〉の一般的なあり方が定式化されていると思われるからである。

<sup>13</sup> この主客関係が「無限性」と呼ばれる所以は、そこでは主体と客体が、単純に区別されたものとして、つまり有限なものとして捉えられていないからである。そうではなく、両者が区別されつつも同時に互いに関係付けられていることが洞察されるとき、それは無限性と解される。なお、構造という点からすれば、欲望や承認だけではなく、悟性章で指摘されるように、生命

も無限性の一つの形態であるといえる（GW9, 99）。その限りで、自己意識としての欲望と生命は「『無限性』構造の二つの側面に過ぎない」（Iber 2004, 100）。

<sup>14</sup> 『エンツィクロペディー』において欲望が「自己感情（Selbstgefühl）」と呼ばれるのは、欲望にとって対象と自己との区別が曖昧であることを示唆していると思われる（GW20, 429）。

<sup>15</sup> 「自らの他在」は感性的確信節や知覚節でも言及されるが、感性的確信節ではただ対象のあり方に関わるだけであり、知覚節では潜在的にのみ主客に関わることに注意する必要がある（cf. GW9, 68, 77）。『大論理学』によれば、「あるもの」と「他なるもの」を関係付け、「対他存在（Seyn-für-Anderes）」の契機の一つとなるのが、「自らの他在」である（GW21, 105-7）。

<sup>16</sup> したがって、〈欲望の経験〉そのものは、欲望の観点ではなく、「われわれ」の観点から叙述されていると考えられる。ホネットは、欲望から承認への移行における「われわれ」の観点と意識の観点の関係を詳察している（Honneth 2008, 196）が、本稿では論じることができない。

<sup>17</sup> H. フルダは、この表現の内に、精神の構造が、意識の経験の現段階において、（1）「われわれに対して」存在しているに過ぎず、「意識に対して」はまだ存在していないこと、（2）精神の概念に過ぎず、まだ実現していないこと、という含意を読み取っている（Fulda 1965, 134）。

[参考文献]

GW: Hegel, Georg. W. F. *Gesammelte Werke*, Rheinisch-Westfälische Akademie der Wissenschaften, Felix Meiner, 1968-.

（※ヘーゲルからの引用は、引用文の後に略号 GW と巻数、及び、頁数を付す。）

Butler, Judith. [1987] 2012. *Subjects of Desire*, Columbia University Press.

Fulda, Hans F. 1965. *Das Problem einer Einleitung in Hegels Wissenschaft der Logik*, Vittorio Klostermann.

Gadamer, Hans - Georg. 1973. “Hegels Dialektik des Selbstbewußtseins,” in *Materialen zu Hegels >Phänomenologie des Geistes<*, Hrsg. von H. F. Fulda und H. Henrich, Suhrkamp.

Honneth, Axel. 2008. “Von der Begierde zur Anerkennung Hegels Begründung von Selbstbewußtsein,” in *Hegels Phänomenologie des Geistes: ein kooperativer Kommentar zu einem Schlüsselwerk der Moderne*, Hrsg. von K. Vieweg und W. Welsch, Suhrkamp.

Hyppolite, Jean. 1946. *Genèse et structure de la phénoménologie de l'esprit de Hegel*, T. 1, Aubier.

Iber, Christian. 2004. “Selbstbewußtsein und Anerkennung in Hegels Phänomenologie des Geistes,” in *Hegels >Phänomenologie des Geistes< Heute*, Hrsg. von Andreas Arndt und Ernst Müller, Akademie Verlag.

Kimmerle, Gerd. 1978. *Sein und Selbst: Untersuchung zur kategorialen Einheit von Vernunft und Geist in Hegels “Phänomenologie des Geistes”*, Bouvier.

Kojève, Alexandre. 1947. *Introduction à la lecture de Hegel : Leçons sur la Phénoménologie de l'Esprit professées de 1933 à 1939 à l'École des Hautes-Études réunies et publiées par Raymond Queneau*, Gallimard.

Neuhauser, Frederick. 2009. “Desire, Recognition, and the Relation between Bondsman and Lord,” in *The Blackwell guide to Hegel's Phenomenology of spirit*, ed. K. R. Westphal, Wiley-Blackwell.

Pippin, Robert B. 2011. *Hegel on self-consciousness: desire and death in the Phenomenology of Spirit*, Princeton University Press.

片山善博. 2002. 『自己の水脈—ヘーゲル「精神現象学」の方法と経験』, 創風社.

加藤尚武編. [1996] 2012. 『ヘーゲル「精神現象学」入門』, 講談社.

幸津國生. 1991. 『哲学の欲求：ヘーゲルの「欲求の哲学」』, 弘文堂.

飛田満. 2005. 『意識の歴史と自己意識』, 以文社.

山口誠一. 1989. 『ヘーゲル哲学の根源：「現象学」の問いの解明』, 法政大学出版局.